

◎今村 義範
笛村 守

飯坂 健一
大塚 将樹

藤田 豊一
竹嶋 竜也

佐藤 潤也
佐藤 康宏

平成5年3月卒業

第 63 期

平成3年秋季～4年夏季



チーム紹介

優勝候補の筆頭格

プロのスカウトが注目する2人の逸材を擁する投手陣と、群を抜く打線の破壊力。優勝候補の筆頭に目されるスケールの大きなチームだ。

春の東北大会の初戦、田村（福島）戦では先発全員の17安打と破壊力を見せつけて快勝。準決勝では剛腕・村上が日大山形相手に散発3安打の完投。決勝では仙台育英（宮城）に屈したが、レベルの高い豪快な野球を存分に展開した。

エース・成田は右の本格派。高校生離れした制球力と落ち着いたマウンドさばきで連打を許さない。特に外角への鋭いスライダーは狙っていてもなかなか打てない。“二枚看板”的もう一人の村上はプロ注目の剛球投手。140キロを超す速球でゲイゲイ押す。3番手・菊地は経験豊かな技巧派の横手投げ。

打線の得点能力は高い。春の県大会で大農・渕谷から3連続、東北大会でも場外を含む2本塁打を記録した大塚を中心に、4番・加藤、5番・成田の破壊力は社会人並みだ。

試合巧者との対戦に不安を残すが「大きな高校生が大きな当たりを飛ばす野球」（加藤主将）で4度目の甲子園を狙う。

◎平成3年

・秋季県北

能代3－1 大館商

能代10－1 鷹巣

能代2－3 大館鳳鳴

・全県選抜

能代3－2 本荘

能代1－3 大曲農

◎平成4年

・春季県北

能代13－2 大館工

能代9－0 大館商

能代4－0 鷹巣農

決 勝 能代3－2 大館鳳鳴

（3年ぶり15回目の優勝）

・全県選抜

能代8－1 角館

能代5－4 大曲農

決 勝 能代3－0 大館鳳鳴

（3年ぶり8回目の優勝）

・東北大会（盛岡市・花巻市）

能代13－3 田村（福島）

能代2－1 日大山形

決 勝 能代3－5 仙台育英

・能代選抜

能代2－4 大曲農

・春季全県選抜 準決勝

能代	2	0	1	0	1	0	0	1	0	5
大曲農	0	1	0	0	0	2	1	0	0	4

◇本塁打＝福司・大塚3（能）

能代が一発攻勢で試合をリードすれば、大曲農業は小技を絡めて小刻みに得点。白熱し

た試合となった。

4本塁打で先攻したものの同点に追い付かれた能代は8回、1死二塁から池端が詰まりながらも左前に落として決勝点を挙げた。

互いに得点こそ許したものの能代・村上、大曲農・湊谷の投げ合いは見ごたえがあった。村上が速球を投げ込み10三振を奪えば、湊谷も外角をうまく使い9奪三振。ともに好投手の名に恥じない力投を見せた。

史上初の3連続弾

能代の3番大塚大が大会史上初の3打席連続本塁打を記録した。

初回。チームメートの福司純一（3年）が左越えに本塁打直後に左中間にたたき込み2者連続となった。3回には1-3から強振して1打席目と全く同じ所へ2本目。3本目も風速5.5mの追い風に乗り、高い弾道で左翼場外へ。

大塚は鷹巣中時代から通算して本塁打を放ったのは昨春の県北地区大会での1本だけ。「屈指の好投手といわれていたので余計に燃えた」という気迫と、「前日湊谷投手をビデオで見ていた」という研究熱心さが3連発の原動力になった。180cm、76kgのがっちりした体格。

納谷聰監督が「もともと素質のある子供なんだがー。盆と正月が一緒に来た感じ」と仰天した快記録。大塚本人は「（鷹巣）中学校時代からのチームメートの村上（鉄也投手=3年）が力投していたので、早く楽にしてあげたかっただけ」と淡々とした表情だった。

・全県大会

能代15-2大曲工

能代7-4鷹巣

能代5-2西目

能代5-2本荘

決 勝 能代6-5金足農

(14年ぶり4回目の甲子園へ)

能代	1	2	0	0	2	0	0	1	0	6
金足農	1	0	2	0	0	0	2	0	0	5

(能代) 成田一加藤

(金足農) 渡部一下間

・甲子園大会

1回戦 能代4-3佐賀東

能代	1	0	0	0	0	0	1	0	2	4
佐賀東	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3

(能代) 成田一加藤

(佐賀東) 角一平田

2回戦 能代0-7尽誠学園

能代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
尽誠学園	1	0	0	1	0	3	2	0	×	7

(能代) 成田・村上一加藤

(尽誠) 渡辺一馬生

粘りの逆転劇 一佐賀東戦一

逆転した直後の9回裏。2死二、三塁とサヨナラのピンチを迎えた。ここで納谷聰監督は、金農との県大会決勝・最終回に強打者の下間康貴（2年）を打席に迎えた場面を思い出したという。条件はあの金農戦同様に厳しかった。佐賀東の打者は3番。二走の平田聰（3年）は故意に挟まれようとしてリードを大きくし、機動力での同点、逆転を狙っていた。

しかし、成田は「走者が気になったが打者との勝負に集中した」。この試合初めて、相手ペースに振り回されない投球で右飛に打ち取り、試合を決めた。

昭和38年、初出場で長浜北（滋賀）相手に初白星を挙げたが、その時の会場は西宮球場だった。甲子園に初めて流れる校歌。選手たちは少し照れくさそうにしながら、声を張り上げていた。

〈部長〉 戸松 恭一

〈監督〉 尾形 徳昭・納谷 聰

〈部員〉 3年生

◎加藤 隆光 土崎 諭史

柴田創一郎 諏訪 剛

鈴木 均 小林 史

成田 昇 大塚 大

村上 鉄也 川原 伸一

根市 秀之
福司 純一

菊地 俊平
三戸 和史

細川 忠廉
柳谷 英佐

夢は再び甲子園

第25期 同窓会会长 田 中 仁 純

29年ぶりに緒戦を飾り、甲子園に高々と流れた校歌に、忘れかけていた命燃える思いの感動をおぼえました。頑張った選手諸君、そして関係者の方々に「ごくろうさん」「ありがとう」をいいたい。

新しい年を迎え、過ぎた夏の思い出となつたけれども、ついきのうのことのように生き生きと息づいています。

今年で75回を迎える甲子園大会ですが、能代勢が甲子園を目指した軌道をたどつてみると、記録に残っているのは、昭和7年奥羽大会予選で角館中に敗れた能代中学が最初のようです。戦前、戦後を通じて甲子園をめざした多くの先輩が、無念の涙をそぞぎ、夢を後輩にたくしてグラウンドを去つたことでしょう。

秋田中が第1回大会の決勝で京都二中に惜敗してから45年間、甲子園への代表は、秋田高校と秋田商業にしめられており、この秋田勢の壁を破ることが甲子園への道をひらくことだったわけでした。

昭和38年、春の選抜大会に大曲農業が、そして夏の甲子園には能代高校が初出場を果たしたのでした。

甲子園への道を切り開くため多くの市民の物心両面にわたる心意気があったわけですが、能代市野球協会主管による「全県高校選抜招待野球大会」もそのひとつであろうと思います。かつて甲子園を目指し、奥羽大会で惜しくもチャンスを逃した経験をもつ鈴木音安氏が、日本青年会議所会頭だった森下仁丹社長を通じて朝日新聞社を動かして開催にこぎつけたもので、能代に強豪チームを招待して地元高校のレベルを向上させたいとする行動だったわけで、それを支えた能代青年会議所の努力が実を結び、市民の盛り上がりに続くことになったと思われます。また29年ぶりの甲子園の

スタンドに、遺族に抱かれた三氏の遺影が選手の活躍を見守っていました。故平川民治氏、佐藤憲一郎氏、相澤東一氏です。特に能代高校の野球部史にはかけがえのない方々です。平民さん、相東さんの愛称で呼ばれるお二人はともに監督を務められ、甲子園に夢をはせた方々です。家族の方の思いは一入のものがあろうかと推察いたします。

佐憲さんは長い間、野球部OBの松陵会会长を務められ38年初出場にチームを率いた太田監督の産みの親でもありました。

太田氏は、能代高校で内野手として選手生活を送り、やがて尊敬する明治大学の島岡監督のもと4年間薫陶をうけ、洗練された東京6大学の野球を身につけて、当時脚光を浴びていたスポーツ記者として『野球界』に入社し人生の第一歩を踏み出していたのです。そのころ能代でもOBはじめ熱心なファンが一度は甲子園へというムードが大いに盛り上がりつつあったのでした。

よき指導者に恵まれることは甲子園への道を切り開くうえで最も重要な条件です。そこに白羽の矢が立ったのが太田氏だったのでした。東京でのサラリーマン生活1年目に降ってわいた監督の要請、かなり悩み抜いたことだと思います。決断させたものは、もちろん彼の母校愛と野球に対する情熱、それにも増して家族の声援でなかったろうかと思います。

太田氏を自分の会社に机を置いて監督業に専念させていた佐憲さんの功績は特筆されてしかるべきと思います。

甲子園出場の宿題を背負わされた太田氏がたてた計画は、3年で甲子園の土を踏むことでした。コーチ陣の強化、素質のある中学生はどんどん秋田市の高校に向かっていたなかでの選手の確保、横たわる幾多の難問を切り崩し目標に向かって邁進する毎日でした。

こうと決めたらテコでも動かない強い信念と、自らの信ずるところは、はた目を気にせずつっぱ

しる行動力は、時として誤解を受けやすく、常に周囲をはらはらさせていました。しかし反面、支持者も増えつあり、勝てるチームづくりは着々と軌道に乗っていきました。

野球はピッチャーの力に負うところが大きいのは周知の事実ですが、内野手出身の太田氏が簾内投手を育てた陰には隠れたエピソードがあります。監督就任当時のバッテリーだった坂本、藤原両選手をつれてライバル秋田商業の監督の経験もあり、かつてプロの東急セネーターズの投手だった赤根谷飛雄太郎氏に投球術の教えをこうたそうです。かつて能代工業のバスケットを日本一の座に導いた加藤監督の初期の体験に相通じるものを感じさせられました。

38年、甲子園をかけて秋田商業との準決勝、引き分けをはさんでの再試合のすえの勝利は、ねばりと勝利の執念を選手に植え付けた太田野球の真髄であろうと思われます。

『翔球』に、同じく理事の一人、松江氏が「能代の太田監督はなんとかして勝ちたい、勝ちすぎるためにはどうすればよいのかと、必死に模索し、その結果として太田野球を作られたように思う」と述べており、特異の境地を切り開いた太田氏への理解を深くしておられます。

太田氏監督在任中の戦績は目を見張るものがあります。常にベスト4、決勝へと進んで、今一步のところで大魚を逸していたわけで、歯ぎしりした市民も多かったことと思われます。

しかし、昭和52年、53年連続して出場、高松投手の投打にわたる活躍とそれをささえた部員一丸となった姿が印象的でした。

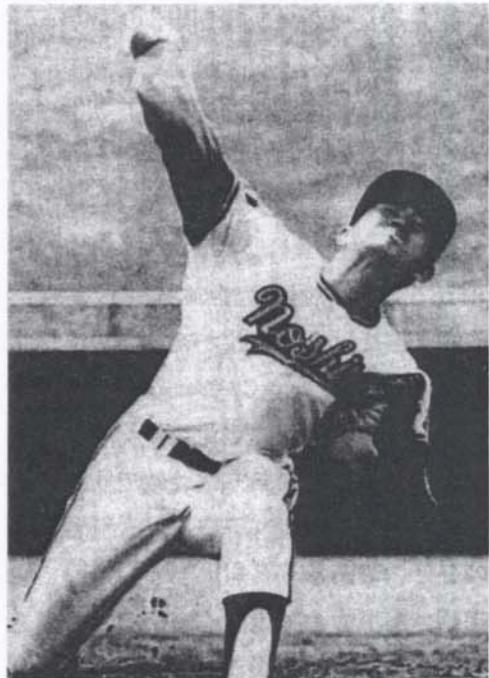
昨年の甲子園は星稜の松井選手への敬遠問題で、明徳義塾の監督が「あの敬遠はすべて私が指示した。甲子園での一勝をめざしてきた選手の気持ちが痛いほどわかるし、星稜に勝つことは石川県と高知県の勝負と思っている」と述べながら、スタンドの声に傷ついた選手を思いだして涙していた姿に、石にかじりついても一勝しなければ帰れない悲壮感が伝わり、監督業の困難さがいまさらのように感じられました。

39年、新潟国体に出場したときのキャプテンだった米沢正裕氏（能代市民体育課長）が「母校が緒戦を飾れてうれしい。いまの選手は初めての甲子園だが、過去3回甲子園の出場経験が有形無形で生きづけた勝利であると思う」と述べておられる。昨年の納谷監督は若いけれども温厚篤実、選手の気持ちを十分尊敬し選手の持てる力を出し切ったすばらしい指導者でした。

甲子園には出場回数を誇る伝統校が多くあるが、次に出場する時は「5回目」という全国でも決してひけをとらない伝統の仲間入りと思われます。あの深紅の優勝旗が今世紀中に白河の闇、いな、雄勝峠を越えることができるでありますか。雄大なロマンであります。

初夢にふさわしい「今年も再び甲子園」を現実のものとしていただくよう、能代勢の健闘を心から願うものであります。

(平成5年1月 北羽新報)



春季東北大会
日大山形打線を3安打に迎えた能代・村上
投手の力投（岩手県営）